

# 芥川だより

発行日 \* 2024年10月1日 e-mail: ab\_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

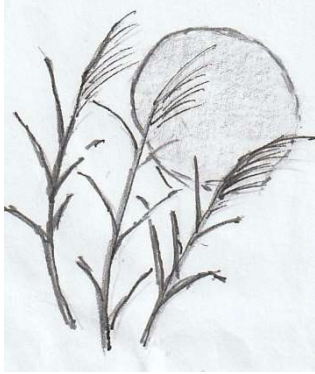
〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

\*\*\*\*\* 一部200円です \*\*\*\*\*

すべては流れの中にある



家内の母親が息を引き取り、わたしは介護手伝いから解放された。長かったためか自分の心理状況もかなり煮詰まっていたので、事情が許せば、余生は山登りに明け暮れようかと思案していた。大峰奥駆道を幾度も歩くのもよい、また近場の六甲山に通うのもいい。

しかし、年金額の少なさと蓄えが少なくは悠長な遊びに呆けている余裕はないと気が付き何がしかの収入を得なければこれから先生活できない。長生きの老後は不安定なことが多いから、遊びは棚上げして、少し働くことにした。葬式が終わった後すぐにハローワークに行き職を探すと警備会社の求人があったので応募し採用され3年ほど働いている。

まったく知らない職だったが、興味深いことばかりで楽しくやっている。仕事といえばほとんど立って赤い誘導棒を振っている。つまり同じ場所に立ち尽くす仕事だ。一日だけの日もあれば数か月立つこともある。絶え間なく通りゆく人や車に注意し安全誘導する。

山登りと警備員とどちらが疲れるか考えることがある。登る山にもよるが、六甲山だと警備員よりも六甲山がしんどく危険である。大峰奥駆道だと命がけの縦走になる。不思議なことに私の年齢と体力から警備員を選んだのは適当な選択だったのだ。

山登りと警備員では全く逆の行為だ。歩くのと立つでは違うように見えるが、では座るはどうだろう。立って、歩いて、座って、寝る。毎日のように繰り返しているが、一度同じ場所に立ち尽くすと思わぬ発見がある。それは、自分が立っていても周りが大きな流れのように動き自分もその流れの中に流されながら立っていると思えてくる。同じ場所に何日も立ち尽くしても同じ情景はない。刻々と周りが変化し、自分も変化している。その微々たる変化が、突然大きな変化をもたらす何とも不思議な世界だ。どっぷりと流れに浸かり流されたい。

死をめぐるあれやこれ(118) 石川 吾郎

新型コロナウイルスの新型ワクチンは人体実験！

世の中では十月一日から、新型コロナウイルスの「定期接種」が始まっている。六五才以上の人が主な対象となる。これには五種類のワクチンが国によって指定されているが、この接種についてはとんでもない危険が隠されている。◆明治製菓ファルマのレプリコン・ワクチン「コスタイベ」というのが、mRNAワクチンの中でも新顔のワクチンだ。従来のファイザーやモデルナのものもmRNAワクチンで、コロナウイルスの表面のスパイクの部分だけ産生して、これに対する抗体を私たちの体内で作らせて効果を出すものだ。しかしこの新顔ワクチンは、注入する mRNA に細工をして人体の中で自己増殖するように作られたもので、注射された後に大量のスパイクをつくり、その分多くの抗体も産生させるといふもの。これは一見、効果を強めるように見えるものの、世界の中で承認された国が一つもないという代物だ。人体の中で mRNA の増殖が制御不可能にならないか、長期的影響がないか、様々な副作用がないかなど、人体に与える影響は、大規模な形では世界中でまだ十分に検証されていないものだ。生産国である米国でも、第三相の治験が行われたベトナムでも薬物として認可されていない。そんな安全性の確認がまだされていない遺伝子操作薬物を、日本政府は世界初で認可して、国民を人体実験に供しようとしているわけだ。実に空恐

芥川だより二二三号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム118	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 127	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談77	祖蔵哲	3
大峰奥駆道83	下村嘉明	4
ボケ老人の雑話	明石幸次郎	5
その6		
オクラの山たより97	因了生	6
隠された歴史72	満田正賢	10
俳句	影山武司	12
編集後記	SK生	12
ふみの道草76	山椒魚	13

素老人☆よもだ帳 (127)

坂本一光

◆偶然と必然

嘘みたいあなたの妻になるなんて

春美

ある新聞の読者文芸(地方版の柳壇)に掲載の句である。簡単な選者評に、「人の出会いは偶然だが、いつしか必然ともなる。いつまでもお幸せに。」とある。

偶然が必然になるのは、人の出会いであらば夫婦に限らない。家族、友人、仕事の間僚、何かの活動の間、学校であれば古い言い方であるが恩師などにも当てはまる。こういう出会いはそれ自体、たとえ仕組みられたものであつたとしても、当人にとつてははじめは偶然の出会いである。もちろん、人に限らない、映画や音楽、一枚の絵、書物等々との出会いにも当てはまることがある。そして、これらの場合に偶然が必然になつたと感じている当人は、そのことを肯定し、納得している。ある種の「幸せ」を感じているだろう。「出会わなければよかった」という偶然を、人は必然と感じることはまずない。念のために言い添えることだが、「出会わなければよかった人など一人もいない」と誰かの歌にありましたね。拓郎だったか。それも真実です。

必然ということについてもう一つ。ヘーゲルなのかどうかわかりませんが、「自由とは必然性の認識である」と哲学者が言っていると、昔むかし耳にしたことがある。しかし、自由というものはどう考えればいいのか、今さらながらよく分からないところがある。たとえば、世の中の動きを見ていてこんなことを思うときがある。

ほどほどの自由が人を麻痺させる

そうかと思うと、これも昔よく聴いた河島英五の『水瓶の唄』にこんな一節も

ある。

同じ考えの人以外は  
誰も側に寄せつけなければ  
いさかいは無くなるだろう  
心にくもりが あるままでも  
違う言葉だとか 違うしくさだとか  
違う神を信じているとか  
覚えてしまった やり方で  
人は人を区別する  
だけど友よそれで  
それで自由になれたかい?  
拳を固く握りしめて  
何も持たずに 生まれてきたのに  
年老いる事も無く  
つらい仕事も無ければ  
涙流すことさえ知らず  
ぼんやり暮らしてゆけただろうが  
水瓶の中に欲しいだけの  
水が満ちあふれていれば  
奪い合う事も無いだろう  
分かち合う心が無くても  
だけど友よそれで  
それで自由になれたかい?  
水瓶の中の 少しばかりの水を  
分かち合つて生きよう  
そうか。

生と死がもう始まっている呱呱の声

そう思ったことがあるが、人は「拳を固く握りしめて、何も持たずに生まれてき

ろしい暴挙と言わざるを得ない。◆この記事を読まれた皆さんには、くれぐれもこの危険の潜むレプリコン・ワクチンを打たれないように、小生はおすすすめする。もしコロナワクチンをご希望なら、みずからを人体実験に供するような行為をせず、従来のファイザーかモデルナ製のものを選択するのがまだマシというものだ。もつとも従来のワクチンも多くの副作用が報告されているのだが。接種にあたっては医療機関に、どのワクチンを使うのかをまず確かめるほうがよい。またこの接種には自己負担金が発生する。これは自治体によって違うので、この額も確認されることもお忘れなく。また当該のワクチンは一瓶で十六人分使うので、多くが老人施設や病院の入院患者に使われるのではないかと推測される。◆この記事を読まれた方は、「レプリコン・ワクチン」について、ぜひご自分でお調べになつて判断をしていただきたい。そしてご自分の周囲にこのことを知らせていつていただきたい。ただしNHKの首都圏ナビのサイトでは、これに根拠なく肯定的な個人の医者のコメントを載せているだけなので注意のこと。◆なお明治製菓ファルマの社員たちの中で次のような本が出版されていることを申し添えておく。『内  
部告発』私たちは売りたいくない!明治製菓ファルマ社員魂の叫び』それにしても、日本という国の崩壊の激しさが恐ろしい。

た」のだ。そうであれば、茜の雲に乗る時も、三途の川を渡る時も、人は渡し賃のほかには両の手に何も持たずにゆけばいいのではないか。

それが必然だと考えることができれば、人はもつと大きな自由の中で生きることができのかもしれないね。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

## 「哲学爺い」の時事放談(77)

祖蔵 哲

「ポスト・フェイクの哲学」

先月9月でも「暑い」で始まったが、もう10月でもまだ30度越えの毎日だ。これほど異常が続くとこれが正常になってくる。時代も歴史もこのように作られるのだと実感する。

異常気象が日常になるに従い、政治、経済、社会などの人間の営みも、異常状態が常態化されてきている。今月7日で勃発から一年になるイスラエル・ガザ戦争はますます周辺国を巻き込みエスカレートしてきている。先月17日、レバノンでヒズボラ組織員を狙ったイスラエル

が仕組んだとされる小型通信機器が相次ぎ爆発した。ドローンに次ぐ新兵器だ。ヒズボラは親イスラエルのイスラム系武装組織。すぐに報復に出たが、その10日後、レバノンの首都ベイルートでイスラエルの空爆によりヒズボラ最高指導者ナスララ師が死亡した。前月、8月にはハマス最高幹部ハニヤ師がイラク訪問中にイスラエルによって暗殺されたが、それ以後

このような要人の暗殺後の相互報復戦争が繰り返されている。そして、いよいよイランが直接イスラエルに対してミサイル攻撃を開始した。イスラエルの背後にはアメリカがいる。この異常状態はもうすでに一線を越えている。核兵器使用を示唆しているロシア、ウクライナ戦争に關しても異常状態は同じである。これらの国際紛争解決に対して国連が全く機能していない。国連パレスチナ難民救済事業機関は、イスラエル軍によるレバノン空爆で死亡した職員がイスラム組織ハマスの幹部だったと明らかにした。こうした不信感が増幅し、また世界の東西、南北問題などが決議に影響し統一的な行動ができていない。暫く言われていることであるが、第二次世界大戦後の連合国軍史観による世界秩序の綻びであろうか。さて、このような国際的な動きに対して、日本国内では政変ムード一色である。23日には立憲民主党で次期代表が、27日には自民党の新総裁が、そして、28日には公明党の新代表が選出された。

衆議院解散が予定されているが根本問題が解決されずにとりあえず白紙に戻するという魂胆が隠されている。これも異常状態を越えて隠す方策の一つであろうか。

政治、経済、社会はこのような暗いニュースばかりである、ではスポーツや文化はどうであろうか。スポーツは相変わらず大谷ブームは続いている。この状態も異常の常態化ではなからうか。彼は次々と記録を作り続けていると報道されている。大リーグ史上初の「ホームラン50本、50盗塁」達成。この記録は本

当に普遍的価値があるものなのか疑問である。なぜなら、通常での野球価値評価は「本塁打、打点、打率」の「三冠王」である。「盗塁」の価値はそんなに高くはない。しかも、彼の盗塁数「50」も多くはない。本塁打と打点こそトップであるが、それは「二冠王」である。ただ、彼の記録には限定語が付属する。「日本人初」「二刀流初」である。そもそも、メジャーリーグに参戦している日本人はまだ少数である。そして二刀流となるとさらに限定される。このように、限定された、競争相手の少ない中で記録が評価されることは「異常」であるはずである。スポーツの世界でもこのように「異常が日常化」されている。

時事ニュースの中で現在最も異常なのはやはりアメリカ政治であろう。7月、ペンシルベニア州での選挙集会中に銃撃され負傷したトランプ前大統領が前月1

6日、再度の暗殺未遂事件に見舞われた。このような短期間に暗殺事件が起きるなどとは異常であるが、またトランプ自身の対応もまた異常である。狙われるほど強くなる、いやこの悲劇を自分の有利に利用している。

世界がこのようになぜ「異常」に慣れきって「日常」になってしまうのか。今月はこのことを哲学してみよう。

(1) フェイクニュースの日常化

近年のニュース報道での異常状態の代表が「フェイクニュース」の氾濫である。「フェイク」とは、「偽物」「でっち上げ」の意味である。同じ「偽なる報道」でも単なる「誤報道」は意図せずに間違った報道であるが、フェイクニュースは欺くことを意図して作られた虚偽、捏造報道の類である。昔から政治的プロパガンダなど戦時下での情報統制に使われていたこともある。しかし、このフェイクニュースが最近、その形を変えて日常化してきている。それは、このニュースを発信する人が欺くことを意図しないで「でたらめな」発言をしているのである。「でたらめ」とはそれが「真実」かどうかには全く関係がない発言である。この代表例が元アメリカ大統領トランプである。かれは暗殺未遂事件の余波を受けての大統領選挙テレビ討論会で、「オハイオ州のスプリングフィールドでは移民が犬を食べている、猫を食べている、

ペットを食べている」と発言した。ただちにファクトチェックが行われ、たがそんな事実はなかった。このような指摘に対してトランプは「私はそのようなように聞いている」といつて聞き直り、逆にこのデマが拡散してトランプの主張が正当化されるに至った。そして、それは彼の支持者が減少していないという結果にも表れている。こんなトランプの支持率は全米の半数なのである。ここでも異常が完全に正常化されている。

「欺くことを意図」した場合の「虚偽ニュース」はその真偽が暴かれると発信者の信用は低下する。しかし、「でたらめ」は、最初から「真実性」については関心がないために、真偽結果には影響されない。つまり、この「でたらめニュース」は「同じ土俵に立つ」ことをしないので勝つことも負けることもない無敵の状態なのである。このような理由で「新たなフェイク」の「異常」は日常化する。

(2) 「ポスト・フェイク」が意味するもの  
この「新たなフェイク」すなわち「ポスト・フェイク」は何を目的としているのだろうか。

さて、少し難しくなるが言語哲学からこの現象を考えてみる。一般に「発言」つまり「言語使用行為」は本来、何かを指し示し、定義するものである。『これはリンゴだ』と言えば、それは目の前に見

えるものが「リンゴである」ということを指す。しかし、すべての事象が言語で表されるのではない。人間はある特定のなかでは、その言葉の定義を知らなくても会話に困らないことが多くある。これを哲学者ウイトゲンシュタインは「家族的類似性」という概念で説明した。家族のなかで「この部屋は暑いね」といえば、それはその部屋の温度を指しているのではない。それは「クーラーを入れて」といつているのだ。

トランプの発言はこの類である。つまり、トランプの支持者は彼の発言の真偽や定義には何の興味もない。興味があるのはかれが誰にどの程度の「反感」もっているのかである。つまり、その移民はペットを食べるほど「おぞましい存在だから排除しなければならない」ということが言いたいのである。一方でトランプは権威ある新聞社報道に対して「それはフェイクニュースだ！」とよく発言する。これは「奴らの言うことを信じるな」という勧告や命令のことである。このように「ポスト・フェイク」は理屈や理性に関係するのではなく、ひたすら感性、感情を刺激するために使われるのである。

(3) 「ポスト・フェイク」が招く民主主義の腐敗  
はじめから真実に関心がなく「でたらめ」を言う人は個人的に倫理問題とされるべきであるが、それを免れ、真実で

ない情報が拡散されると当然それに該当する対象はさまざまな被害にあうことになる。トランプのでたらめ発言によりハイチからの移民は暴力的な排斥に晒されている。そしてそれは更に拡散し「移民」というだけで排斥の対象になるのである。次に問題となるのが、このようなフェイクニュースの拡散の過程で他者への信頼が低下し、またマスメディアなどの知的権威への信頼感が低下することである。他者や情報への不信頼は民主主義における意思決定の基盤の崩壊につながる。

この流れの源流は2016年からの「ポスト・トゥルース」「脱・真実」に見られる。大手メディアの「真実」よりも「フェイクニュース」の「フェイク」が人々の「感情」を揺り動かし、英国の「Brexit」離脱やトランプ大統領の勝利が実現した。これ以後「民主主義」はどんどん信頼を失い、ナショナリズム、民族紛争などが加速するようになってきている。

(4) 真実の価値  
さて、「ポスト・フェイク」は「真実」に興味がないといった。では、「真実」や「真理」には本当に価値がないのだろうか。自然法則の真理、「谷から飛び降りれば落ちて死ぬ」や経験知の真理「毒キノコを食べれば死ぬ」などは生命にかかわる真実である。しかし、真実を知らないほうが幸せな場合もある。例えば「がん告知」がある。しかし、昔は知らせないほうが当

人にとって幸せと考えられていたが、現在は変化している。「真実を知った結果」のほうが、より質の高い「生」が考えられるからである。しかし、そもそも「真実」とは知る「こと」や信じる「こと」の「結果」によって価値があるのではないと考えることもできる。つまり「真実」それ自体に価値があるのである。これが「真実を知る徳」である。「フェイク」は知的な徳の欠如であり、結果さえよければいいという「功利主義」に陥る。しかし、それは長期的には世界、人類が墮落の道に落ちていくのである。

## 大峯奥駈道 (83)

下村 嘉明

体験型人間学 33

警備員をしているといろいろと考えさせられることが多い。車の誘導を考えても面白い。信号のない交差点で工事関係車両を動かすときや、かなり高齢な運転者が慎重に運転されている時などに、車が渋滞して動かなくなることがある。今時の運転者は、時間との勝負で走り回っている宅配便など通行が遅くなるこ

とへの抵抗が非常に強い。一日に百個近い宅配便を配っているから無理もない。私が、交通量の多い交差点では、自分でもほれぼれするような誘導をする。信号がないから、自分が信号だから自由に誘導できる。パトカーや緊急車両ですら私の指示に従わなければならない。

私の判断は早く渋滞を見越して指示を通行車両に送り、スピードを落とすことなく通過させるから渋滞は起こらない。込み入った現場でトロトロした誘導は運転手から反発をくらう。それに引き換えてきばきとした誘導は、運転手から好感され手を振ってくれたりする。

しかし、このような緊迫した場所で困るケースは、超高齢者の車だ、指示にならないか従わない。遅い、運転が下手、その上窓を開けて文句を言う。阪急線のあの道では、外車に乗った高齢者がのろのろ運転で通過するときに文句を言ったことが、あったが、あきれ果てた。高齢化社会とは、こんなわがままでわからずやの人たちが多くなるということでもある。



ボケ老人の雑記(その6)

明石 幸次郎

先日、白内障手術を受けるために待合室で自分の番が来るのを待っていました。付き添いらしき70歳半ばの女性が二人が、私の近くで待っていました。二人は赤の他人ながら、迎え合わせに座ったこともあり、大きな声で話し始めました。

A「お宅の主人は歳は幾つですか？」 B「75歳ですわ、お宅は？」 A「うちと同じような歳ですなあ、76歳です」

B「あ、そうですか？ 働いてはりますのん？」 A「いやいや65で仕事辞めてから、ずっと家におりますねん。70位までは働いもらわな、家におられても鬱陶しいですやろ。いや、もう十分働いたと言うて、まだ元気やのに辞めてしまいましたんや！」 B「そうでつか！ うちも似たり寄ったりで、手に職を持つとものに70前に、仕事もうええわ。若いもんについて行かれへんと言うて辞めてしまいましたわ。それ以来、家にいてま

すわ」 A「一緒ですな。もう、朝、昼、

晩とご飯の用意せなアカンので嫌ですな」

B「ホンマ、三度三度、鬱陶しいですな」

A「奥さん、外出するときはどうしては

るん？」 B「まあ、大概、お昼は作っ

て出掛けます。昼くらい、自分で何か作

るか、コンビニかスーパーで弁当でも買

って食べてくれたらエエのに。そんな

食べられへんと言いまんねん」 A「そ

う、うちも一緒ですわ。仕事辞めてから

は、外出もあまりしませんし、趣味もな

いし、家でテレビばかり見てますわ。

家のことは何もしてくれへん、何かして

くれたらエエんですが。この頃は余り言

わなくなりましたが、私が外出するとな

ると、どこに行くんや、誰と会うんや、

何時頃帰るんや、とか飯はどうするん

や？ とか、色々聞かれましたわ。なん

や、子供みたいになつてくるんですかね、

嫌ですなあ」 B「うちもそうでしたが、

この前、外出するときに初めて、勝手に

何でもお昼は食べといてね。と出て行き

ましたんや。昼食べなくても、死にまへ

んわ。もう三度三度作つてられまへん、

という気持ちになつてきましたわ！」

A「そうそう、うちも今度、奥さんのよ

うにさせてもらおうかなあ」 B「そう

しなはれ。お昼くらい何とでもなります

やんか？ 慣れですやん。慣らしていかな

あきませんなあ」と言う会話を途切れる

ことなく、近くに座っている旦那と同じ

ることなく喋っていました。

この話を後日、韓国人の後輩K君と酒

を飲みながら「男は、年取ってからでも、

飯くらいは自分で作り、生活力を身につ

け自立しないと、嫁さんとの関係も悪く

なるなあ。下手に長生きは出来ないなあ」と話したら、同じ様な話は韓国の小話にも出てきますと言つてK君は「60歳代の男が死んで地獄の閻魔大王にお前はど

うして死んだのかと問われたので「嫁さん

に預金通帳はどうなつてたのか見せる？」と言つたら殴られました」次に70歳代の男にお前はど

うした？ と問うと「私は嫁さんに飯はどうした？

と言つたら殴られ死にました」80歳代

の男にお前はどした？ 「私は嫁さん

においお前、厚化粧してどこに行くん

や？ と言つたら殴られ死にました」9

0歳代に男にお前はどした？ 「私は朝

起きて目を開いたら、嫁に殴られ死にま

した」というのがありますと話してくれ

ました。日本人の感覚からしたら、少し

違和感がありますが、歳を取つてからの

伴侶との関係に本質的な内容が明確に言

い当てていると思ひ笑われました。

60歳が定年とすれば、今は65歳ま

で伸びてはいるが、男が働いてお金を稼

がなくなると家においての役割を変えて

いかなないといけないのでは？ と再認識

しました。定年になり家にいる時間が増

加しても、コミュニケーションがない。

妻の行動が気になる。妻に感謝の言葉が



ない。食事を含め家事のことをなにもしない、性格、価値観の違いという事が原因となり、熟年離婚が増えているようです。女性もお金、家事、家族特に旦那からの束縛、世話などから自由になりたいという願望が、はっきりと男の定年辺りから強く出てくるのではと思います。

我々の世代は「男は仕事をして稼いで家族を養う。あとは、何しても大目に見てくれた」「女は家事、育児、家族の世話、近所付き合い」などと役割がどことなく決まっていました。それは、働いてお金を稼いでいる時までと、男は早く自覚して、役割を変えて飯くらい自分で作れて、家事もこなせる生活力を身につけないと安寧な老後が過こせないかも知れませんね。間違っても「お前、化粧をどこに行くんや？」とか「俺の飯はどうなるねん?」「何時ごろ帰ってくるんや?」などのことは、伴侶に言っただけじゃありません。

## オクラの山たより (97)

### 困り生

一

先月に引き続き元武士の明治初年の話

です。樋口一葉の父親である樋口則義はなんと江戸から明治への混乱期を乗り越えました。しかし、多くの元武士たちはたとえ元二五〇〇石取の上級武士であろうと一葉の乳姉妹である稲葉家の「お嬢」さまのように貧窮に苦しむことになっていました。運命のわかれみちは官員になれるかどうかであったのです。

磯田道史氏の「武士の家計簿」(新潮新書 2003年刊)によれば加賀藩御算用者(おさんようもの)要するに加賀藩の会計処理係であった元高(維新前の禄高)一八〇石の猪山家の当主猪山成之は、維新後に海軍省に出仕して海軍省出納課長となりました。成之は東京で一人暮らし、彼の父親と家族とは金沢で暮らし東京からの仕送り家禄等で彼らは生活していました。明治五年の家禄は一七〇円(現在の三五〇万円ほど)で明治七年の成之の年収は一二三〇〇円(現在の三六〇〇万円ほど)でした。成之の伯母の嫁ぎ先は元高一二〇石であったのですが、その家の嫡子は金沢製紙場で日雇い勤めとなつて一八七四(明治七)年の年収は四八〇円(現在の一五〇万円ほど)でした。官員になれた士族となれなかった士族との強烈な差。これが士族にとつての明治維新の現実でした。新政府を樹立した人々が官員となつて税金から好き勝手に超高給をもらう仕組みを作つてさんざん利益を得た結果です。繰り返しますが、官員の給料があるかどうかは士族にとつての運命の

わかれみちでした。そのため多くの武士は政府・県庁への出仕を切望しました。収入も多く、名譽な職業とされていたからです。しかし、それは狭き門であり、際だつた秀才、弁舌、縁故と周旋がなければまず無理でした。

また「士族の商法」に手を出し失敗した者も数多くいました。商売が失敗した主な原因は商売を恥とする考えが根強くあり、おまけに資本が小さく、知識も販路も持っていなかったことにありました。たとえば猪山家の親類で呉服屋を始めた家は「看板をあげ申さず」商売しており、資本が少なくして仕入れが思うに任せず品物が「不足の様子ゆえ、注文これあり候ても在り合わせず」という状態でした。これでは商売ができないのも道理といえます。

園田英弘氏の研究によれば明治国家で官職にありつた士族は全体の一六%で八四%の士族は官職につくことはできなかったとされています。この時期に官職(今の東京都職員)を得て混乱期を見事に乗り切つた樋口則義の得意ぶりを思うべし、です。

二

東大の赤門前に「桜木の宿」と一葉が後に呼んだ家を構えた時期が樋口家全体にとつて最も豊かで幸せな時期でした。「桜木の宿」に一葉が住んでいたのは満

四歳から九歳のこと、生まれたのは現在の東京都千代田区内幸町一番地にあつた東京府の構内にあつた長屋でした。一葉が生まれたとき父親の則義が出した出生届が残されています。

私妻儀、今朝第八時女子出産仕り候、此の段、御届け申し上げ候。

壬申三月二十五日 樋口為之助

新生児の名前は「奈津」「夏」「なつ」とも書きました。一葉自身がよく使つていたのは夏子です。便宜上、以下では夏子を使用します。樋口一葉の本名です。届出の末尾にある「樋口為之助」は一葉の父親である樋口則義です。彼は江戸から明治にかけて大吉、八十之進、為之助、則義と何度も名前を変えています。この届出提出の当時は為之助でした。

一葉が九歳になるまでのあいだで大きな出来事は妹くいの誕生と姉のふじの結婚と離婚、そして再婚でしょう。

妹の邦子(「くに」「国子」とも書きました)が生まれたのは一八七四(明治七)年の六月、一葉が二歳の時でした。現在、樋口家と一葉に関する多くの資料が反故紙にいたるまで残されているのは妹邦子の尽力といつてもよく、このこと一つとっても一葉にとつては大きな意味を持つた妹の誕生でした。

姉のふじの結婚は一八七四(明治七)十月で、相手は則義と同じく東京府の官

員であった士族和仁元利の息子である和仁元亀でした。この結婚は八ヶ月ほどで破綻し翌年七月にふじの方から母親に頼んでふじは樋口家にもどっています。

そして、それから四年後、樋口家とつて大きな事件が起きます。そのことは後から述べるとして、この頃の一葉はどうしていたのでしょうか。そのことを伝える資料はありませんが、邦子が母親から聞いた話というのが一つ伝わっています。

明治七年一二月に読売新聞が発行され、樋口家でもこれを講読し、二人の兄たちが声を出して読むとまだ二歳の一葉がこれを真似たのですが、それがいかにも大人びていたので、まわりの大人たちがみな驚いたというのです。幼いころからの一葉の才媛ぶりは親族に知れ渡っており、誰もが認める一葉の個性は「賢い」ということなりました。一葉もそれを自覚していたらしく日記に次のように書いています。

その頃（七歳の頃）の人はみな、我を見て「おとなしき子」とほめ、「物おぼえよき子」といひけり。父は人に誇りたまへり。

父親にとつて一葉（夏子）は子どもたちの中でも飛び切りの自慢の子であり、将来が楽しみな子でした。

一八七七（明治一〇）年三月、五歳の一葉は本郷学校（いまの小学校です）に入学します。しかし、できたばかりの公立学校の教育方針が漢籍や日本の古典を中心に学んできた則義の考えとは合わず、在学三〇日ほどで退学し、私立小学校の吉川学校に入ります。そこで一葉は小学読本や四書（儒学の入門書とされる「論語」「孟子」「大学」「中庸」）

を教えられ、翌年に「下等小学第八級（今の小学校一年の前半）」を卒業しました。そのまま第七級に進級し、一八八一（明治十四）年四月に一葉は吉川学校を退学しています。

七歳の頃からの読書への傾倒ぶりはさまざまに後年みずから記した「一葉日記」（二十六年八月）には

七つといふとしより草双紙といふものを好みて、手まり、やり羽子（遣羽子）、羽根突き遊びのこと。その遊びの道具が羽子板をなげうちて読みけるが、その中にも一と好みけるは、英雄豪傑の伝、任侠義人の行為などのそぞろ身にしむ様に覚えて、すべて勇ましく花やかなるが嬉しき。

とあります。「英雄豪傑の伝、任侠義人の行為」を書いた「草双紙」はたぶん滝沢馬琴の作品であろう考えられています。

す。次の談話筆記はそれを示す一応の参考にはなりません。記録したのは一葉のもとに古典を習うために通った穴沢清次郎です。

（一葉は）調子の高い、きれいな声で講義をしたり、広く国文学の話をしたりしてくれました。そして、ほ、ほ、ほと笑ふ癖でした。

七つの歳に、三日で八犬伝を読んだと申しますので、よく、そんなに早く読み上げた私が云ふと「目が二つあるから、二行ずつ読めるでせう。ほ、ほ、ほ」と夏ちゃんは云ひました。

馬琴の「南総里見八犬伝」全九八巻は今の岩波文庫でも十分冊という長大な物語です。それをたった三日間で七歳の子が読破するというのはすさまじい読書のスピードです。読書した場所は本郷六丁目の家には木造の倉庫の中です。母親のたきが一葉の読書を嫌ったため一葉は倉庫の中の薄明りで読書をしました。夢中で読んだのは兄たちも読んだ平仮名ばかりの草双紙かもしれません。幼少期の一葉の読書の速さについては樋口家を訪れた父則義の従姉妹にあたる広瀬ぶんが、一葉が本を読みながら大変なスピードでページを繰るのを目撃した、という証言があります。

また、「英雄豪傑の伝、任侠義人」の

話が好きであったのは百姓の苦境を救うため百姓惣代として老中阿部正弘に駕籠訴した血、強い正義感・義侠心の血が幼い一葉にも流れていたためかもしれません。事実、のちに二二歳となった一葉が銘酒屋（一杯飲み屋と売春宿を二緒にした店）の女小林愛を苦界から救おうとして奔走したことはよく知られています。

七歳の一葉が薄暗い倉庫の中で夢中になって草双紙を読んでいたところ樋口家ではとんでもないことが起こっていました。それは先に和仁家から離婚して家に帰ってきていた長女ふじが武蔵国比企郡出身の農民の子である久保木長十郎と懇ろの仲となったことです。久保木長十郎が樋口家の隣にある法真寺の構内に住んでいたために親しくなつたようです。則義夫婦はこのことに烈火の如く怒ります。「男女、媒（なかだち）なくして相会ふべからず。両親の承諾なしにひそかに款（かき）を通ずるが如きは淫婦の所行」である。つまり、当人どうしの自由恋愛を頭から否定して結婚の相手は自分の意志や愛情だけで決めてはならず、親が認めた我が家に釣り合う家柄の者から選ぶべきだというのが当時の一般的な考えでしたから、当然のことながら親娘の悶着が起きました。しかも相手は士族ならぬ農民の子でした。ふじの両親の猛反対も





が、翌年十月に警視庁に月給一五円（今の四五万円ほど。当時の公務員（官員）の給料が高いのは先ほど述べた事情による）で再就職します。辞めたときは早期リタイアして経済的な自立を目指すつもりであったかもしれませんが、泉太郎の病状を見てるとそう呑気に構えていられなくなったのかも知れません。

帰京後の六月、則義の知人の周旋で泉太郎は大蔵省出納局配賦課の雇いとなりました。しかし、九月に気管支カタル（実際には結核であったと考えられます）の診断を受けます。何の結果の出なかった関西行きは泉太郎の肉体をかなり弱める原因になっていたのでしょうか。泉太郎は休職届を出し、病勢の進むままに一月に退職となりました。亡くなったのは十二月二十七日のこと。二三歳の若い死でした。

泉太郎が大蔵省の雇いとなった同じ月に則義は定年で警視庁を退職しています。則義は定職を失っても退職後の貯えはあつたらしく泉太郎の葬式は盛大に執り行われました。死亡広告もかなり派手に二、三の新聞に掲載されました。興味深いのは漱石の父親である夏目直克が弔問に来ていることです。直克は警視庁において則義の上司であっただけではなく、彼も長男大（諱は大助）、次男栄之助（諱は直則）の二人を結核で失ったばかりでした。直克は結核で子供を失ったどうし悲しみを分かち合いたかったか

もしれません。なお、この二人のうち長男の大は樋口夏子（一葉）との間に縁談があつたことは漱石の妻夏目鏡子の語りを松岡譲が記録した「漱石の思い出」に書かれた有名な話です。警視庁に勤めていた頃の樋口家の家計の一端も分かる内容なので少し長いですが、以下に示します。

そのころ父（夏目直克）は府庁から警視庁にまわつてそこで勤めていたのだそうですが、その下役に樋口一葉女史のお父さんが勤めていられました。父は年も年でしたし、それに名主のいい顔で腕利きだといつても学問はなし、小うるさく働くのも億劫だったので、樋口さんの方は学問もあり、それに誠に小まめに立ち働くので、父はたいそう重宝がって使っておりまして、時々金を貸してやったものだと申します。……しかし、いいなりに金を用立てていたものの、なかなか返してくれません。……中略……

樋口の娘に字もりっぱだし、歌も作るし、第一たいそうな才媛がある。あれを（大兄さんに）もらっちゃどうかという話を持ち上がりました。ところが考えたのはお父さん。ただの下役でさえこれくらい金を借りられるのに、娘をもらつたりなどしたら、それこそどうなることか、と算盤を弾いたものとみえまして、（大兄さんと樋

口夏子さんとの縁談の）話はそれつきりとなりました。

この夏目鏡子の思い出話から見ても泉太郎の療養は樋口家にとつてかなりの負担であつたことがわかります。

泉太郎が亡くなった頃、一葉は中島歌子が主宰していた歌塾「萩の舎」で和歌を学んでいました。一葉の日記は約五十冊にもわたるものですが、その始まりは一八八七（明治二〇）年一月一日から書かれた「身のふる衣 まきのいち」です。この手記は一月一日から八月二十五日までとびとびに記されており、その内容は歌塾「萩の舎」の稽古の様子や歌会の模様が中心です。この手記が書かれた時期に泉太郎は一葉と同じ家で暮らしていたはずなのですが、彼のことはまったく触れられていません。まだまだ自分の家に覆いかぶさってくる黒い雲に気づくには早かつたかも知れません。

私立青海学校卒業後、十代の一葉については次回、詳しく述べることにします。

## 【補足】

### 一葉の姉ふじのほん

一葉の姉ふじ（1857～1898）は一葉のきょうだいのうちで最も運の悪いめぐりあわせで生まれた女性であつたかもしれ

して江戸へ出たのはたきがふじを身ごもつたことによります。江戸へ出た二人は苦勞を重ねます。則義は真下専之丞のこなで蕃書調所の使用人となり、たきはふじを里子に出して旗本稲葉家の乳母となつて奉公します。ふじは七つの年まで両親の愛情を知らずに育つた子でした。

明治七年、一七歳のふじは最初の結婚をしますが、翌年、離婚し出戻っています。明治十二年にふじは近所に住んでいた何の定職もなかった久保木長十郎と再婚しました。後に一葉も住む本郷菊坂町に暮らして一四年に長男の秀太郎が生まれています。一葉は久保木長十郎には好感が持てず、姉と長十郎との結婚を不潔なもののように考えていただけでなく、姉に対してかなり冷やかな目を向けていたようです。それは一葉の日記の中にある姉に関する記述を見ていくと分かります。一言でいうと誠に素っ気ない。ふじのことは「久保木の姉君」と書かれてあるだけで、そこには何の親近感も感じられません。

一葉の姉ふじへの思いが最も出ているのは明治二六年五月一日の日記の記述です。

母君（この日六〇歳となった誕生日につき、芝の兄弟（次兄の虎之助）及び久保木の姉君を呼ぶ。こころうき人々なれど同じはらからと聞こゆるものを。

次兄の虎之助や姉のふじを「こころうき人々なれど同じはらからと聞こゆるものを」と書き、兄弟姉妹ながら信頼し合って親しくつき合おうという気がとうに失せているかのごとき書き方です。

久保木ふじは一葉の死の一年後、母親の樋口たきが六五歳で亡くなると、その後を追うように翌年に四二歳で病死しました。息子の秀太郎も母親のふじに続いて翌年亡くなっています。一八歳の死でした。久保木長十郎は明治四四年まで生き、五九歳で亡くなっています。

明治に不幸な人生を送った女性は数多くいたでしょうが、そうした女性の一人としてふじは心に残る存在です。

## 隠された歴史(72)

満田 正賢

今回は、任那日本府の「阿賢移那斯(あけえなし)」、「佐魯麻都(さろまつ)」に焦点を当てることによって、倭国の王朝交代に伴う、朝鮮半島での倭国の旧王朝残存勢力と新王朝からの派遣役人たちの混乱した実態を百済の目と日本天皇(倭国の新王朝Ⅱ後期九州王朝の天子)の目を通して見てきました。今回は、前期九

州王朝(倭の五王とそれに続く筑紫の君磐井)の時代の朝鮮半島における所業を「阿賢移那斯」、「佐魯麻都」の先代の記述を通して眺めてみたいと思います。

倭の五王とは中国の正史である『宋書』『南齊書』『梁書』『南史』に記されている、讚・珍・済・興・武という、五世紀の倭国五代の王です。

・(四二二年)倭王讚、宋に朝献し、武帝から除授の詔をうける。『宋書』夷蛮伝

・(四三八年)これより先(前の意味、以下同)、倭王讚没し、弟珍立つ。この年、宋に朝献し、自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し、正式の任命を求める。詔して「安東將軍倭国王」に除す。『宋書』夷蛮伝

四月、宋文帝、珍を「安東將軍倭国王」とする。『宋書』文帝紀

珍はまた、倭隋ら十二人を平西・征虜・冠軍・輔国將軍にされんことを求め、許される。『宋書』夷蛮伝

・(四四三年)この年、済は宋・文帝に朝献して、「安東將軍倭国王」とされる。『宋書』夷蛮伝

・(四五一年)宋朝・文帝から「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」を加号される。安東將軍はもとのまま。『宋書』夷蛮伝

七月、「安東大将軍」に進号する。『宋書』文帝紀

『宋書』文帝紀

また、上った二十三人も宋朝から將軍号・郡太守号を与えられる。『宋書』夷蛮伝

・(四六二年)これより先、済没し、世子の興が遣使貢獻する。三月、宋・孝武帝、興を「安東將軍倭国王」とする。『宋書』孝武帝紀、夷蛮伝

・(四七七年)十一月、遣使して貢物を献ずる。『宋書』順帝紀

これより先、興没して弟の武立つ。武は自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称する。『宋書』夷蛮伝

・(四七八年)上表して、自ら「開府儀同三司」と称し、叙正を求める。順帝、武を「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」とする。『宋書』順帝紀、夷蛮伝

・(四七九年)南齊の高帝、王朝樹立に伴い、倭王の武を「鎮東大将軍」(征東將軍)に進号。『南齊書』東南夷伝

・(五〇二年)四月、梁の武帝、王朝樹立に伴い、倭王武を「征東大将軍」に進号する。『梁書』武帝紀

珍は宋から「安東將軍倭国王」の称号を得て、宋の冊封体制に入ります。そして、歴代倭王は朝鮮半島における倭の權益の承諾を宋に要求します。その結果、武は「使持節都督倭・新羅・任那・加

羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」という称号を得ます。つまり、倭の五王時代に倭国が朝鮮半島を侵略していた事実は間違いないと考えられます。

又、高句麗の好太王碑文には次のような記述が刻まれています。

「百済・新羅はもと高句麗に服属する民で、これまで高句麗に朝貢してきた。ところが、倭が辛卯の年(三九一)以来、海をこえて襲来し、百済や新羅などを破り、臣民とした。そこで好太王は、三九六年にみずから水軍をひきいて百済を討伐した。：百済王は困って好太王に降伏して自ら誓った。「これからのちは永くあなたの奴隷になりましょう」と。：三九九年、百済はさきの誓約をやぶって倭と通じたので、好太王は平壤へ行った。そのとき新羅は使いを送ってきて好太王に告げた。「倭人が国境地帯に満ちあふれ、城を攻めおとし、新羅を倭の民にしてしまいました。私たちは王に従ってその指

示をおおぎたいのです」と。：四〇〇年、好太王は歩兵と騎兵あわせて五万の兵を派遣して新羅を救わせた。その軍が男居城から新羅城に行ってみると、倭の兵がその中に満ちていたが、高句麗軍が到着すると、退却した」

これは、四世紀末、三九一年から四〇〇年にわたる出来事を記したものです。中国史書に記された倭の五王の記事と好太王碑の記事をつなぎ合わせると、四世

紀末から五世紀末までは、倭が朝鮮半島に対する侵略行為を続けていたと理解することが出来ます。

私は、「隠された歴史(70)」で、韓国栄山江流域に五世紀後半に突如として現れた北部九州様式の前方後円墳が六世紀初頭に突如として消滅したことも、五二一年〜五三三年に倭国が任那四県を百済に割譲したことも、三国史記新羅本紀に四〇五年から五〇〇年まで倭国からの侵犯記事が継続し、その後倭国関連記事が途絶えていることも、倭国の王朝交代が関係していると考察しました。

通説では、倭の五王はヤマト政権の天皇であり、倭王武は雄略天皇で間違いのないとされていますが、讚・珍・濟・興については、日本書紀に記された各天皇の關係と合わないため、諸説紛々です。一方、私は「隠された歴史(13)」で、日本書紀雄略紀の記述を分析し、「日本書紀の雄略紀に記された宋書や百濟新撰を引用した記述については、九州王朝に残っていた伝承を拝借して記述した可能性が高い。一方、朝鮮半島を舞台にした大量の記事は近畿王朝による古備征服譚の記事を、見方を変えかつ舞台を朝鮮半島に変えて記載したものである可能性が高い。雄略紀は日本書紀の他の条のように、朝鮮半島の史書に実際に記された未詳な人物を近畿王朝の人物に置換えて話を作り上げるという手法をとらず、国内記事の舞台

を朝鮮半島に移し、日本が朝鮮諸国の目上にいたということと露骨にアピールしている点で、日本書紀全体の中でも極めて悪質な作文である。」と結論付けました。そもそも、日本書紀が描いた近畿王朝一元論では、韓国栄山江流域に五世紀後半に突如として現れた北部九州様式の前方後円墳が六世紀初頭に突如として消滅したことの説明がつかないのです。すなわち、南北朝時代の中国南朝と交流し、その冊封体制に入り、朝鮮半島を侵略していた倭国はヤマト政権ではありえない。それは北九州にあった前期九州王朝である、と考えるべきです。

さて、前回紹介した、欽明紀に記された移那斯、麻都の系譜についてです。日本書紀、顕宗紀には移那斯、麻都の先祖についての記述があります。「三年、この歳、紀生磐(おいわ)宿禰が、任那を占有してよりどころとして、高麗と交通した。まさに西「の方」三韓に王となろうとして、宮司を整理し、神聖(かみ)を自称した。任那の左魯(さる)、那奇他甲背(なかつこうはい)らの計を用いて、百済の適莫爾解(ちやくまくにげ)を爾林(にりむ)で殺した。(爾林は高麗の地である。)帶山城(しとろもものさし)「至羅北道井邑郡泰仁」を築いて、東道をふせぎ守った。「食」糧を運ぶ港を「遮」断して、軍を飢えさせ困らせた。百濟王は大いに怒り、領軍古爾解、内頭「六

佐平の「莫古解ら」を「派」遣して、軍衆をひきいて帶山に出向き攻めた。そこで紀磐宿禰は、進軍して逆襲した。胆氣「きもつたま」はますますさかんで、向かうところみな破った。「人」で百「人」に当たった。「ところが」にわかに兵器が尽き力もつきた。事のならぬのを知り、任那より帰った。それで百濟国は、左魯、那奇他甲背ら三百余人を殺した。」

岩波版日本書紀の欽明五年二月条に以下の分注がついています。

「下の那奇蛇甲背と同一人物が、顕宗三年、是歳条にみえる任那佐魯、那奇他甲背と同一人物で、佐魯麻都の先祖であろうか。なお、甲背が姓の類であろうことは、ここにあげられた三人のいずれの場合も、人名のあとに付いていることである。」

この顕宗三年記事は、百濟本記によるものと考えられます。紀生磐宿禰は任那に居住する日本人ではありません。一方、佐魯、那奇他甲背らは任那にいて紀生磐宿禰に呼応する人物です。顕宗紀には他に朝鮮半島関連の記事がないことから、百濟本記の記事をベースに、紀生磐宿禰という任那とは関係のない人物を付け加えて、あたかもヤマト政権が朝鮮半島を支配していたような記事を創作したのではないのでしょうか

この記事は、佐魯、那奇他甲背が、百濟を裏切り、高句麗と通じ、百濟の將軍を殺したと書いています。この記事の背

景にあるものは、前期九州王朝時代の任那日本府と百濟との、高句麗も関係した確執だったと思われれます。欽明五年二月条、三月条の記述を見ると、顕宗紀の佐魯、那奇他甲背が、任那日本府の中心にいた阿賢移那斯、佐魯麻都の祖先(父?)であるのは間違いなさそうです。即ち百濟と任那日本府(前期九州王朝)とは以前から確執があり、その影響もあって百濟は後期九州王朝への倭国の王朝交代を歓迎したという図式が読み取れるのではないのでしょうか。

好太王碑に記された「倭」の関連記事は、四世紀末から五世紀初の話です。一方、顕宗(弘計)天皇は通説が倭王武に比定する雄略天皇の二代後、六世紀初に即位したとされる継体天皇の三代前の天皇と記紀に記されていることから、顕宗紀の記事は五世紀後半の話であると考えられます。すなわち倭の五王時代の出来事であると思われれます。好太王碑に記された「倭」はその後も前期九州王朝の拠点である任那日本府として存続しており、その残存勢力が顕宗紀に見える「佐魯」、「那奇他甲背」であり、その子の世代である「阿賢移那斯」、「佐魯麻都」ではなかったのでしょうか。

好太王碑に記された「倭(任那日本府)は、好太王碑の時代には百濟と通じて高句麗と対立し、その後、百濟を裏切つて高句麗と通じる、という複雑な動きをとっていたものと思われれます。この任那日



本府にいた前期九州王朝の残存勢力は、時によって百済と敵対する行動をとっていた為、百済から嫌われていました。そして、その為、倭国の王朝交代は百済に歓迎され、任那日本府にいた前期九州王朝の残存勢力は、百済と後期九州王朝によって駆逐されていく、という歴史があったことが想定されます。

通説では、倭の五王の時代の朝鮮半島記事は雄略期に描かれていると考えられています。これに対し私は、「隠された歴史(13)」で、「雄略紀の朝鮮半島記事は悪質な作文である」と断定しました。そして、前期九州王朝ともいえる倭の五王時代の朝鮮半島記事は日本書紀では隠されている、と考えました。しかし今回、欽明紀に記された「阿賢移那斯」、「佐魯麻都」の先代の記述、顕宗紀に記された「左魯」、「那奇他甲背」についての記述によって、五世紀後半の倭の五王の時代の真の朝鮮半島記事を見つけることが出来ました。そしてそれは、前期九州王朝(倭の五王)の朝鮮半島侵略が、百済、新羅、高句麗相互の関係と同様に、ある時は同盟関係を保ち、そしてある時は敵対関係となる、という行動を伴っていたことが明らかになったと考えます。



## 俳句

影山 武司

井戸水の手桶に跳ねて盆の寺  
映画館出でて余韻の盆の月  
箴言を写す手帳や秋の夜  
墨痕のかすれに力南洲忌  
弓を引く射場の深閑秋澄めり  
的場へと一矢鋭く素風かな  
秋晴や拝殿脇の日章旗  
利酒の呼び込みの声弾みをり  
独り居の厨に釣瓶落しかな  
秋茜群れて光のさざ波に

## 編集後記

S K 生

▼朝晩は涼しくなり「秋冷の候」という常套句もピッタリの季節となった。読書の秋であるが、最近、ますます不読書の人が増

えたという。その理由は本を読むとノイズ(関心のない情報)となる知識が読む人に多く提供されるので、そうしたノイズとなる知識を忌避するような人が多くなっているためだという。▼思えば多種多様の記事を書いた「芥川だより」にはそのノイズが多く集まっているともいえる。自分だけの興味に従って情報を選び好みすると適正な判断力を失うとか。ぜひともどの記事もノイズと決めつけず目を通してほしい、とは編集者のいつわらざる思いではある。



サクラフタデ



ナンバンギセル



酔芙蓉

ある新聞の川柳選者がこんなことを書いていた。

「凝縮された短詩は固形スープにも似て、脳裏で溶けて様々な回想を呼び覚ます味を秘めている」そしてまた、「川柳の風刺精神は揶揄や愚弄とは違う。毒は耳かき一杯ぐらいの方が効きがいい」と。前半の指摘は川柳に限らない。短歌や俳句にも共通して短詩が備えるべき味について言い得て妙である。後半は川柳の特徴を言うが、耳かき一杯の毒を盛るのはなかなか難しいことである。さて今回も『綺羅星』の紹介である。

『綺羅星』 千代子

お茶の間へ平気で震度五の恐怖 正彦  
レンコンの穴に希望の風通し 正彦

自分の身边を詠む常に客観的な作句姿勢が頼もしい。全句、さらりと表現しているが、読み手を納得させて清々しい。

さあ行けと母の時計がボンと鳴る 敦

母の句には弱い。そして多い。しかしこの句の「さあ行け」の上五に下五の「ボンと鳴る」は説得力がある。

生き残るために群れる回遊魚 菊江

文明の世にも、人は生き残るために離合集散を繰り返す。生き残るために群れることも強さ。回遊魚は言い得て妙。

知り尽くしたはずの自宅にある段差

秋子

在る有る。充分知り尽くしている段差に前後不覚の痛さに地団駄。人は生きるがために大きな難、小さな段差と闘う。

絵手紙に残す父似のネギ坊主 江美子

ハガキ一杯の絵手紙の葱坊主は説得力満点。葱坊主が父に似ているとは。寡黙な父の後ろ頭も背中も絵になる。

記憶ならグラデーションに消え始め

昭三郎

記憶ならグラデーション、と永らえて詠む実感句。鮮明に昨日のように浮かぶ記憶の瞬間があつたり、昨日の記憶がなかったり。

生き生きて記憶もやがてカタルシス。

振り向けば星の数ほど恥を捨て

百子

大きい恥、小さい恥どれほど捨てて来たことか。その度に人として大人として、魂を掴んで来た

ゴミ袋一つで足りぬ妻のグチ 俊信

笑ってしまった。日常の喧きは山ほどあるが一句に詠うのは難しい。

妻のグチはゴミ袋一つでは足りません。それを聞くのは夫の役目か、夫もつらい。

アダムとイブに随うしかないか。

名も無い花コップに挿したきれいだよ

裕治

素直にそのまま句にした句だが、名も無い花でもコップに挿してきれいだつたと実感。優しさが下五に生きている。



彼岸花